

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## アスペクトの緩急とモダリティの濃淡：ノダ文をめぐる日露対照研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 神戸市外国語大学研究会 公開日: 2018-12-28 キーワード: ロシア語, 日本語, アスペクト, モダリティ, ノダ文 作成者: 金子, 百合子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2430">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2430</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# アスペクトの緩急とモダリティの濃淡

## —ノダ文をめぐる日露対照研究—

金子 百合子

### 0. はじめに

例えばロシア語と日本語のように、系統的にかげ離れた言語を対照する際、ある特定の意味が各言語においてどのような具体的な表現形式をとり、それが意味内容の細部においてどのように一致し、あるいは相違するののかというミクロな視点がある一方、もう一方には、相似する意味が異なる言語間に存在することを前提に、それが各言語の内部でどのように別の意味野と相関し、体系の中で位置づけられ、最終的に、母語話者による言語活動の中でどのように実現するか、というマクロな視点がある。アスペクトを例に取れば、前者の視点においては、パーフェクティブ（以下、PF）とインパーフェクティブ（以下、IPF）の意味がロシア語では完了体と不完了体の対立として実現し、日本語では、条件によっては、スル形とテイル形の対立によって実現することから、それらの形が表す差異を論じることができる<sup>1</sup>。後者の視点に立てば、PFとIPFの意味を表す表現形式が各対象言語に存在することを前提に、各言語内でアスペクト意味が、テンス・モダリティ・ヴォイス・他動性といった他のカテゴリーとどのような関係性を持ち、各言語体系の中に位置づけられているのか、それらの相互作用の結果は個々の言表にどのように反映されるのかを、対象言語間で比較分析することができる。両方の視点に対照言語研究には必要であり、また、ひとつの実体をなす言語を扱う以上、両者の視点から得られる結果には本質的な矛盾があってはならず、いずれの視点ももう一方の視点を補うものでなければならない。そうやって各言語の全体像がより正確なものになっていく。その際、その両方の視点を緩やかに一体化する言語相対的な観念あるいはその言語が持つ発想や思考様式の傾向が存在することは無視できないであろう。「表現が発想により決まり、発想の違いが表現の形を左右する」（森田

<sup>1</sup> 筆者はスル形とテイル形の対立をロシア語の完了体と不完了体のような形態的な二項対立と考えているわけではない。スル形は、それが本来「動作概念の直接的な言語化の形」（尾上 2001:366-367）であることから、動詞語彙意味と文脈によってはPFとして機能すると考える。

1981:247) という指摘が示唆するのは、各言語の表現は、その言語話者の事態把握の仕方に深く関係しており、“同じ”意味を表す表現形式が対象言語間に見出されるからといって、表現形式を生み出す動機づけと各個別の言語体系における内容的価値も同じだということにはならないということだ。

本稿では、上述のことを念頭に、日本人に愛されているアントン・チェーホフの短編『可愛い女』とその和訳 10 点を言語資料に<sup>2</sup>、ロシア語と日本語の語りのテキストにおける動的事象の表し方にはどのような言語相対的特徴が見られるのかを探る。具体的には、ロシア語原典と日本語訳における表現構造の差異——特に動詞文から名詞文（ノダ文）への変換——の実態を明らかにし、各言語のアスペクト・テンス・モダリティの諸カテゴリーがテキスト構造の中でどのように相関しているのかを考察する。

## 1. 言語的世界像と意味的優勢素

ある言語的世界像を象徴する意味概念野のことを研究者はその言語文化の「基盤的観念」、「キーワード」、「意味的優勢素」などと様々に称してきたが、ある意味野がある言語文化にとってそのように特別な価値を持つものであれば、その言語の実態において、当該意味野の構成の綿密さ、そこに属する言語表現の高使用率、表現の低い意図性、他言語への翻訳上の困難、といった現象が見られることが指摘されている (Wierzbicka 1992; Падучева 1996; Петрухина 2003; Апресян 2006; Зализняк Анна, Левонтина и Шмелев 2012)。

ロシア語の言語的世界像を特徴づけるものとしては「不定性」が候補として多くの研究者に支持されており、パドゥチェヴァ (Падучева 1996:165-178) はロシア語の文学作品とそのフランス語翻訳で比較すると、原文に存在する不定性の指標が翻訳ではかなりの程度脱落することを示した。他にも、ペトルーヒナ (Петрухина 2003) は動的事象の提示のし方において、ロシア語は、他のスラヴ諸語に比べて、動作の時間的境界を指示する「限界・境界」の意味概念が優勢に振舞うことを指摘している。

日本語の言語的世界像の特徴として「自己中心主義 egocentrism」あるいは「状況の話者による主観的解釈」の程度の相対的高さと、「動作の限界性指示」の程度の相対的低さ、という二点を挙げるができる。第一点目に関して言えば、主観化や主体化 subjectification の言語表現は多くの言語に一定レベルは

<sup>2</sup>『世界文学総合目録——ロシア編』(2012: 245-247)によれば、A. チェーホフの短編『可愛い女 Душечка』(本稿では便宜的にこの呼び名に統一する)の訳者が 22 人挙げられている。本稿で検討対象とした和訳 10 点の中には当目録に載っていない訳者もいるが、いずれも日本人訳者の手によるもので、名の通る出版社から出版され入手が比較的容易なものである。

見出されることが知られているが、日本語は「主観性への傾き」（大江 1975:11）<sup>3</sup>、「主観的把握」（池上 2000:278）、「私」中心の視点」（森田 1998:23）が言語現象として相対的に広い範囲に影響を強く与えていると指摘されている。

第二点目の、日本語の動詞語彙による、動作の限界性指示の相対的弱さは、英語の動詞との比較において多くの研究者によって指摘されてきた。これはロシア語動詞との比較において、さらに顕著に表面化する。詳しくは次節で述べるが、本稿が検討対象とする日本語とロシア語の語りのテキストにおける動的事象の表し方に直接的に、密接に関係するのが、動作の把握のし方を問題にするアスペクトのカテゴリーである。異言語間におけるアスペクト的な意味優素の差異は、第一に、話者による現実世界の切り分けかたの相違に、そして第二に、それを名づける言語的意味特徴の選択やその名づけの方法に反映されることになる。

## 2. ロシア語と日本語のアスペクト意味野における意味的優素

ロシア語では動作の展開における限界点が動作の「臨界点」として状況の時間構造とその時間的境界の像を焦点化する。ロシア語と異なり、あるいは英語と異なり、日本語については動的事象の限界の意味づけの弱さが指摘されてきた（影山 1990、Ikegami 1993）<sup>4</sup>。影山（2002:148）の言葉を借りれば、「英語が境界を強く意識することを「有界」と呼ぶとすると、日本語には「無界」という言葉を当てはめると、ぴったりかもしれない」ということだ。影山の「有界」「無界」といった表現は、限界性という意味特徴の顕在化の有無を言い表したもので、日本語における動的事象の現われの特徴を示すには、これでは「特徴の無いことを特徴とする」ことになってしまい、本質的にはそうなのであるが、レッテルとして都合が悪い。したがって、筆者は日本語における限界性の意味づけの弱さを事象の「安定性 *стабильность, stability*」を志向する度合いの強さの裏返しと考える（Kaneko 2005, 金子 2005）。「安定性」を意味的優素と便宜的に捉えることで、テイル、テアル、テイク、テクルのような状況の延びた側面を表すアスペクト的表現形式の豊かさや基本（辞書）形のスル形が有する動作の総体的表象としての安定性なども複合的に捉えられるのではないかと考える。

<sup>3</sup>「あるできごとを話し手が外からでなく、自ら当事者として内から直接的に捉え、描く傾向が日本語には非常に強いと言える」（大江 1975:282）

<sup>4</sup>ここに挙げた研究者の指摘は日本語と英語との対照で導き出されたものであるが、英語の単純過去形とロシア語の完了体との比較では、前者が「弱い完成相」、後者が「強い完成相」と位置づけられる（Князев 2007:374）。したがって、ここに日本語を加えれば、限界性の意味づけの強さは日本語<英語<ロシア語の順に並ぶ。

さて、日本語において動作のひとまとまり性 (PF) は動詞の単純形式であるル形 (過去のタ形) で表されるが、ル形 (タ形) の文法的形態が表す「ひとまとまり性」は、ロシア語の完了体動詞のそれと異なり、動作の臨界点への指示をその語彙意味に内包するものではなく、動作の時間的境界を明示的に意味するものではない。例えば、ロシア語の完了体動詞 *вернуться* (帰る) は動作の終了点、つまり「帰ってきたこと」それのみを語彙意味に含むが、日本語の「帰る」はその動作の開始点 (山本さんはもう帰りました)、終了点 (父は明け方帰った)、過程 (寄り道しながら帰った) を意味することができる。時間枠に限定された文脈で用いられる PF としてのル形 (タ形) はそれが由来する基本形のル形の性格——本来、素材表示形でありアスペクト的に「無色」(尾上 2001)——を受け継いでおり、テイル形のように積極的にアスペクト意味を限定する役目を担っていない。

したがって、アスペクトのカテゴリーにおいて、ロシア語と日本語の意味的優劣素は、言わば“点”か“線”か、という対極に位置する意味内容をもっているということになる。この点において、チェーホフの短編『可愛い女』は非常に興味深い例を提供する。この短編の語りのテキストはその大部分が不完了体動詞で構成されているが、これは不完了体動詞のもつ「習慣的特徴づけの機能」(узуально-характеризующая функция – Золотова 1998a:27) が、主人公オーレンカの人となり を記述するために、効果的に用いられているからである。一方、テキストで完了体動詞が用いられるのは、物語 (すなわち主人公のオーレンカ) にとって重要な、ある個別具体的な出来事が生じる時であり、それはオーレンカの人生の新たな一ページを刻み、物語を前に進める。このことを、少し長いが、当作品からの抜粋で以下に示す。ロシア語原文の地の文中の主文にある動詞述語を不完了体動詞の場合は点線で、完了体動詞の場合は二重線で示し、それぞれに対応する和訳中の表現をロシア語に付せられた同様の線種で示す。

И зимой <sup>(a)</sup>жили хорошо. <sup>(b)</sup>Сняли городской театр на всю зиму и <sup>(c)</sup>сдавали его на короткие сроки то малороссийской труппе, то фокуснику, то местным любителям. Оленька <sup>(d)</sup>полнела и вся <sup>(e)</sup>сияла от удовольствия, а Кукин <sup>(f)</sup>худел и <sup>(g)</sup>желтел и <sup>(h)</sup>жаловался на страшные убытки, хотя всю зиму дела шли недурно. По ночам он <sup>(i)</sup>кашлял, а она <sup>(j)</sup>поила его малиной и липовым цветом, <sup>(k)</sup>натирала одеколоном, <sup>(l)</sup>кутала в свои мягкие шали.

— Какой ты у меня славенький! — <sup>(m)</sup>говорила она совершенно искренно, приглаживая ему волосы. — Какой ты у меня хорошенький!

В великом посту он <sup>(n)</sup>уехал в Москву набирать труппу, а она без него не <sup>(o)</sup>могла спать, всё <sup>(p)</sup>сидела у окна и <sup>(q)</sup>смотрела на звезды. И в это время она <sup>(r)</sup>сравнивала себя с курами, которые тоже всю ночь не спят и испытывают беспокойство, когда в курятнике нет петуха. Кукин <sup>(s)</sup>задержался в Москве и <sup>(t)</sup>писал, что вернется к Святой, и в письмах уже <sup>(u)</sup>делал распоряжения насчет «Тиволи». Но под страстной понедельник, поздно вечером, вдруг <sup>(v)</sup>раздался зловещий стук в ворота; кто-то <sup>(w)</sup>бил в калитку, как в бочку: бум! бум! бум! Сонная кухарка, шлепая босыми ногами по лужам, <sup>(x)</sup>побежала отворять.

— Отворите, сделайте милость! — <sup>(y)</sup>говорил кто-то за воротами глухим басом.  
— Вам телеграмма!

Оленька и раньше <sup>(z)</sup>получала телеграммы от мужа, но теперь почему-то так и <sup>(aa)</sup>обомлела. Дрожащими руками она <sup>(bb)</sup>распечатала телеграмму и <sup>(cc)</sup>прочла следующее: [...]

その冬も二人は楽しく <sup>(a)</sup>暮した。町の劇場をその冬いっぱい <sup>(b)</sup>借り切って、短い期限をきってウクライナ人の劇団や、奇術師や、土地の素人芝居に <sup>(c)</sup>又貸しした。オーレンカはますます <sup>(d)</sup>肥って、頭から足の先まで満悦の色に <sup>(e)</sup>照り輝いていたが、一方クーキンはますます <sup>(f)</sup>瘠せ細りますます <sup>(g)</sup>黄色くになって、その冬はずっと事業がうまく行っていたくせに、えらい欠損だと <sup>(h)</sup>こぼしてばかりいた。彼は夜中になるときまって <sup>(i)</sup>咳が出たので、彼女は彼に木苺の汁や菩提樹の花の絞り汁を <sup>(j)</sup>飲ませたり、オーデコロンを <sup>(k)</sup>すり込んでやったり、自分のふかふかしたショールで <sup>(l)</sup>くるんでやったりした。

「あなたはまったく何て立派な人でしょうねえ！」と彼女は彼の髪をなでつけてやりながら、嘘いつわりない本心からそう <sup>(m)</sup>言うのだった。「あなたはまったく何ていい人でしょうねえ！」

大齋期に彼は一座を募集にモスクヴァへ <sup>(n)</sup>旅立ったが、彼女は良人がいないと <sup>(o)</sup>眠れないので、ずっと窓ぎわに <sup>(p)</sup>坐りとおして星ばかり <sup>(q)</sup>眺めていた。そんな時には彼女は自分の身を、鶏小屋に雄鶏がいないとやはり夜っぴて眠らずに心配しつつける雌鶏に <sup>(r)</sup>ひきくらべてみるのだった。クーキンはモスクヴァで <sup>(s)</sup>手間どって、帰るのは復活祭の頃になると <sup>(t)</sup>書いてよこし、手紙の都度『ティヴォリ』遊園のことで早手まわしに色々と <sup>(u)</sup>指図をしてよこした。ところが一夜あければ御受難週の月曜日という晩おそく、とつぜん不吉なノックの <sup>(v)</sup>音が門口でした。誰かしら木戸を、まるで樽でもたたくように、ブーム！ ブーム！ ブーム！ と <sup>(w)</sup>叩いたのだった。寝ぼけ眼の炊事女が、はだしで水たまりをばちゃばちゃいわせながら、木戸をあけに <sup>(x)</sup>駈けだした。

「開けてください、まことにお手数さま！」と誰かが門の外で、陰にこもっ

た低音で<sup>(v)</sup>言うのだった。「電報ですよ！」

オーレンカは前にも良人から<sup>(z)</sup>電報をもらったことは何べんかあったけれど、今度はどういうわけかはっと<sup>(aa)</sup>気が遠くなってしまった。ぶるぶる顫える手で彼女は電報の<sup>(bb)</sup>封を切って、次のような文面を<sup>(cc)</sup>読んだ。[略] (神西清「可愛い女」)

オーレンカのおだやかな日常が、真夜中の突然のノック (該当記号 (v)、完了体) により終わりを告げ、あれよあれよと事態が急テンポで展開していく、その部分が後半の完了体動詞の連続で文法的に、明示的に示される。このような、ロシア語の完了体と不完了体の鮮やかな意味的対立を基盤として成立する、アスペクト形式によるコントラストとそれが生み出すテキスト構成上の効果が、和訳における動詞述語の形態からは伝達されないことは見てのとおりである。ル形 (過去のタ形) は不完了体動詞の (a) *жили* 「暮らした」でも、完了体動詞の (cc) *прочла* 「読んだ」でも同様に現れる。とりわけ、当作品では使用頻度が多い動作の反復を表す不完了体動詞に対して、日本語ではスル形でもテイル形でも他の構文 (例えば、「したものだった」) でも反復の意味を表すことが可能である。この点も原文における具体的な単一出来事を表す完了体動詞の登場のインパクトが和訳で伝わらない一因である。

さて、ロシア語原文に見られる動詞アスペクトによる緩急のコントラストが十分に発揮されない邦訳では、いったい何が起きているのだろうか。前述したような、日本語の言語的世界像についての指摘の証左となるような事態が起こっているのであろうか。

### 3. ロシア語の動詞文から日本語の名詞文へ

『可愛い女』のロシア語原典と和訳を比較して興味深いのは、ロシア語原文の動詞文が、日本語訳では名詞文に構造が変換するケースが多い点だ。

#### 3.1 動詞文と名詞文

日本語は多様な表現構造を持つ名詞文に特徴があると指摘されており、日本語学においては長く充実した研究史がある。このような文脈で使われる「名詞文」は広く解釈されることが多く、例えば、擬似名詞述語文 (南 1993) や体言締め文 (角田 1996) などと称される場合もある<sup>5</sup>。角田はこの種の文は日本語では頻繁に用いられる構文であるが、類型論的に見ると珍しいのではないかと

<sup>5</sup> 角田の「体言締め文」の体言には、(A) 普通名詞 (例: 政府は米の輸入を認める意向だ)、(B) 形式名詞 (例: 太郎は明日東京へ行くつもりだ)、(C) ノ (つまりノダ文) の3種類が含まれる (角田 1996:141-145)。

も指摘している（角田 1996:139-140）。この点に関して、日本語と比較的文構造が類似すると言われる韓国語でさえ、日本語の名詞表現の優位性が際立つという考察もある（林（八） 1995）。新屋（2014:16）もまた、日本語が名詞中心的であり、事態を名詞的に把握する側面があると述べる。

動詞文と名詞文の違いはその対象の時への関わり方で大きく異なる。動詞文がその名の通り、時空間で変化する対象について本質的に述べるものであれば（例「姉は縫い物をしている」）、名詞文は基本的に「時間を越えて成立する特徴・特性」（益岡 2013:15）として対象の属性について述べる（例「姉は医者だ」）。動詞文と名詞文は、形式的な叙述類型の大別であるが（三上 1972:40-41）、その内容を反映した分類の名称には、例えば、「物語り文」と「品さだめ文」（佐久間 1995）、「事象叙述」と「属性叙述」（益岡 2000, 2013）などがある。「属性叙述とは、ある対象がある属性（特徴や性質）を有することを表現するものであり、事象叙述とはある時空間に実現・存在する事象（現象）を表現するものである」（益岡 2000:39）と述べる益岡は、日本語の文がまさに「名詞文（属性叙述文）を基盤に据えている」（益岡 2007:106）と指摘する。

ロシアの機能文法家であるゾロトヴァは、動詞文モデル（*сестра шьет*）が主体の動作 *действие*（アクションの特徴）を典型的意味として表す一方で、名詞文モデル（*Сестра – врач*）はモノ *предмет* のクラス分け（属性を決定する特徴）を典型的に表すとした（Золотова 1998b:105）。さらに、いずれの文モデルが実現するかは、「まずは、言語外現象の性格における差異によって、そこに反映されるモノの差異によって決まり、それから国語の言語意識 *национальное языковое сознание* の中でこれらの現象をカテゴリー化する手段によって決まる」（Золотова 1998b:106）という。すなわち、記述される言語外現実には普遍的とみなされても、各個別言語におけるそのカテゴリー化は言語相対的である。その一方で、各言語内にあっても同一事象の記述に異なる文構造を用いることは可能で、例えば、「本を読む」動作は典型的には動詞で表されるが、「読書、読むこと」のように動作は名詞でも表すことができる。ゾロトヴァによれば、動作が動詞で、モノが名詞で表されるような、言語外現実の存在様式に相応しい品詞を中心とした文モデルは「最も経済的で簡潔なもの」（Золотова 1998b:110）になる。

益岡とゾロトヴァの言明を比べると、名詞文がモノの属性分類をするものだという特徴づけが類似する。一方で、動詞文に代表される存在様式を「(生起する) 事象」「コト」と名づける益岡に対して、ゾロトヴァに限らず、ロシア語学では動詞が表す中心的な存在様式を「(動作主によって引き起こされる) 動作」と捉えていることは、池上（1981）の提唱した「する言語」と「なる言

語」の差異を反映する。このことは特に動的事象の過程的側面の認識の仕方に対象言語間で大きな差異が生じることにつながるのであるが、この点に関してはここでは触れない。

さて、次節以降で検討していくチェーホフの『可愛い女』の翻訳 10 点では、原文の同一箇所和訳に動詞文が使われる場合も、名詞文が使われる場合もある。ゾロトヴァはこのような統語的シノニムに対して、あらゆる形式的な構造の違いは、意味の違いを示唆するものであり、意味的な差異があるからこそ言語内の共存が保証され、話者が意識的あるいは無意識的に行う手段の選択はまさにその意味的差異によって決定すると述べる (Золотова 1998b:190)。とりわけ原文の構造が本来動詞文であるものを故意に名詞文にするという話者(訳者)による操作(選択)に、何が影響を与えているかという点は興味深い。先述のように、名詞文には色々種類があるが、本稿では紙面の都合上、特にノダ文に限定して考察していく。だが、検討された和訳テキストではノダ文以外にも、あるいはノダ文に加えて、別のタイプの名詞文に構造を変換する例は多く観察されるので一例だけ紹介する。

(1) *Она постоянно любила кого-нибудь и не могла без этого.*

イ. ロシア語原文と構造が同じ動詞文

(g)<sup>6</sup> 彼女はいつも必ず誰かを愛していて、一時も愛さないではいられなかった。

(i) 彼女はいつも誰かしらに恋していて、それなしではすませられなかった。

ロ. 名詞文 (連体修飾文)

(b) 彼女はしょっちゅう誰かしら好きで堪らない人があって、それがなくてはいられない女だった。

(d) オーレンカはいつでもだれかしらを愛さずには生きていられない女だった。

(e) 彼女はたえず誰かしらを愛していた。愛することなしではいけない性分だった。

(f) 彼女はいつもだれか好きな人があったし、それなしにはいられぬ女性だった。

(h) 彼女は絶えず誰かしらを好きになって、人を愛せずにはいけない質だった。

ハ. 名詞文 (ノダ文)

<sup>6</sup> これ以降、アルファベットの記号 (a-j) は『可愛い女』の和訳 10 点のそれぞれを区別する記号として用いる (各記号が示す翻訳作品一覧は本稿末を参照)。

- (a) 彼女は常に誰かを愛してゐた。そして誰かを愛することなしにはゐられないのだった。
- (c) 彼女はいつもだれかを愛していたし、愛なしではいられなかったのである。
- (j) 彼女はいつだって誰かのことが好きで、好きな人なしではいられなかったのだ。

ロシア語原文と同様に動詞文で和訳しているものは10点中2点しかなく、連体修飾した普通名詞で終わる名詞文は5点ある。ここに使用される名詞「女(性)」や「性分、質」はロシア語原文には無い語彙であるが、ヒロイン「オーレニカ」の人となりや記述する不完了体動詞文の使用意図が和訳で明示化されているものだ。ノダ文を用いた和訳も3点あり、後者二つを大きく名詞文とまとめれば、10点の翻訳のうち8点までもが、もともとのロシア語の動詞文を名詞文に変換して訳していることになる。また、重要なことであるが、ロシア語と同様に動詞文で訳している2点も日本語として不自然な文にはなっていない。つまり、動詞文から名詞文へ文構造を変換すること自体に、この場合は、必然性がない。この「変換する必然性がないにも関わらず、変換することを選択する」点にこそ、言語相対的な文モデルの指向性があり、言語的世界像の一端を反映すると考えられるのである。

### 3.2 ノダ文とは

日本語においてノダ文は説明、解説、解釈、強調、背後事情、既知情報提示、文脈の結束などの機能を果たす構文として知られてきた(Alfonso 1966, 久野 1973, 寺村 1984, 三上 1972, マックグロイン 1984, 奥田 1990, 益岡 2007, 野田 1997, 清水 1997, 田野村 2002, Головнин 1973, Басс 2004 他)。上に羅列したものが本質なのか効果なのか、より包括的な概念と実現の下位タイプなのか、など議論は今も続いている。ノダ文についてはいくつものモノグラフィーが出ているので詳細には立ち入らない(野田 1997, 田野村 2002, 名嶋 2007)。本稿で重要なのは、第一に、ノダ文が名詞文であること、第二に、ノダ文はモダリティのカテゴリーに分類されること、第三に、ノダ文の使用は主観的であること、以上三点である。

まず、第一の点である。ノダ文の意味的、機能的な本質は何かという点には研究者間で意見の一致を見なくとも、ノダ文が名詞文であることに異論を唱える者はいない。ある事態(コト)を表すPという命題があるとすると、ノダ文はPを体言化する、つまり名詞文にする。Pの名詞化は、Pを「客体化、概念化、固定化」(林(大) 1964)させ、「叙述内容は<文そのもの>ではない<文

の材料>」(吉田 2000:20)となる。このPを既定事実、既成命題として提示することこそ、ノダ文の本質であり、それが多様な意味を生み出す基盤と指摘する研究者も多い(三上 1972:239、林(大) 1964、野田 1997)。

第二の点——ノダ文の使用は話者の主観によること——についても研究者間でおおかた一致する。三上(1972:239)は既成命題に「話手の主観的責任」を表すノダを添えて提示することがノダ文の根本的意味と主張した<sup>7</sup>。だが、話者が主観的に「何をどうするか」では、先述のノダ文の本質をどこに捉えるかによって、研究者の意見も異なる。命題が示す出来事を話者が主観的に「解釈」したり、「評価」したり、「強調して取り上げ」たり、「複数命題間の関係性を推論で導き出し」たり、という具合である。いずれにせよ、記述されている事態そのものの情報を客観的に伝達するだけではなく、話者が自らの選択によって、事態への自らの心的態度を添える、表明するという点が重要である。

第二の点から直接的に第三の点が導かれる。すなわち、ノダ文が話し手の心的態度を表現するモーダルな指標であるということ、これまでも「説明のムード explanatory moods」(寺村 1984)、「説明のモダリティ」(益岡 2007、仁田 2000)、「解釈モダリティ」(名嶋 2007)などと呼ばれてきた。モダリティはその性格上、具体的な個である話者に属することから「作家 автор の個性的な文体がもつ特徴のひとつにもなる」(Басс 2004:269)。

本稿では、検討の対象を物語の語り部分に現れるノダ文に限定している。分析結果を先走って述べれば、ロシア語原文においてある事態を描写する同一場面の和訳にノダ文を使用するかしないかの選択は、10人の訳者間で一致しないことが多い。すなわち、この場合、ノダ文の使用によって、記述される言語外現実の内的構造になんら本質的な変化がもたらされているわけではない<sup>8</sup>。

ノダ文と非ノダ文の違いについて、ノダ文は事実や状況を客観的に伝えたり、諸出来事の継起性を一方的に伝達したりする「報告」文には登場しないとされる。ノダ文の非客観的な性格については、ノダ文が前提となる出来事や場面对する話者の主観的評価や解釈を表す(あるいは聞き手に解釈するよう促す——中嶋 2007:92)、話者が事態について「説明」する(益岡 2007)ものであることの裏返しであり、また、そのように性格づけられたノダ文は前提状況とは無関係の独立した新しい出来事の生起を“ただそれだけ”表すことはでき

<sup>7</sup> 三上(1972:238)はノダ文をスル・シタの単純時と対立する反省時(組立て時)として、テンスのカテゴリーに便宜上含めているが、これはノダ文に現れるテンス形態の組み合わせに従った形式的な命名にすぎないと断っている。

<sup>8</sup> ノダ文の研究ではノダ文の使用が必須・自然であったり、ノダ文が逆に使用されなかったりする場合における文の条件が既にいくつも指摘されているが、本稿ではノダ文の使用が任意の場合のテキストに限定する。

ないというのが事実報告文にそぐわない理由である（三上 1972:241、マクグロイン 1984:257、田野村 2002:32-33）。バス（Bacc 2004:253）もまた、継起的な諸動作が記述されるときは、各文が「ストーリーラインの展開に必要となる能動的な動作の交代を表して」おり、「テキスト中の伝達価値において等しく重要」となるが故に、ノダ文による強調手段が用いられないとその理由を説明している。

以上、これまで述べてきたそれぞれの点について各研究者が指摘する具体的な主張のどれが最も適切かという問題に答えるには、綿密な検討を要するが、本稿の範囲では研究者が合意する最大公約数の三点を確認するだけで留めておく。

ノダ文を対照言語学的に扱ったものもかなりの数を数え、英語（池上 1981、霜崎 1981）、スペイン語（福寫 1994、和佐 2003）、中国語（杉村 1980、下地 2003）、朝鮮語（崔 2003）、英語・フランス語・中国語・スペイン語（野田 1997）、ロシア語（Bacc 2004）等がある。中には日本語で書かれた文学作品とその翻訳を分析対象にしたものもあるが、本稿のベクトルは逆で、ロシア語原典の短編とその和訳 10 点を分析対象とする。これは 1 節で述べた意味的優勢素の特徴である当該表現の使用頻度の高さならびに使用に際しての低い意図性を明らかにしたかったためである。日本語原典 → 外国語訳についての研究では、翻訳の難しさ及び外国語訳でノダ文が捨象される傾向が高いことが指摘されているが、本稿のアプローチ、外国語原典 → 日本語訳、では逆にロシア語原文に機能の類似する表現が無い場合にも訳者が積極的にノダ文を用いるという現象が見られた。また、バス（Bacc 2004:269-270）でも、『アンナ・カレーニナ』の抜粋の和訳に見られるノダ文の使用を二人の訳者で比較している。これについては後ほど必要に応じて触れる。

### 3.3 ノダ文とテンス

『可愛い女』の和訳に見られるノダ文の検討に移る前に、ノダ文のテンスについて簡単に触れておかなければならない。ノダ文のテンスは命題部分の述語が持つテンスとノダ文の「ダ」のテンスの組み合わせで4種類ある。それらは「過去性を持たない命題＋過去性を持たないノダ」( $P_{NPST} + \text{ノダ}_{NPST}$ 、例：するのだ)、「過去性を持たない命題＋過去性を持つノダ」( $P_{NPST} + \text{ノダ} + \text{タ}_{PST}$ 、例：するのだった)、「過去性を持つ命題＋過去性を持たないノダ」( $P_{PST} + \text{ノダ}_{NPST}$ 、例：したのだ)、「過去性を持つ命題＋過去性を持つノダ」( $P_{PST} + \text{ノダ} + \text{タ}_{PST}$ 、例：したのだった)である。『可愛い女』には、これらの4種類のノダ文が同一箇所が登場する例がある。

(2) [*Но под страстной понедельник, поздно вечером, вдруг раздался зловецкий стук в ворота;*] *кто-то бил в калитку, как в бочку: бум! бум! бум!*

[ところが、復活祭すぐ前の月曜日に、夜おそくなってから、だしぬけに不吉な物音が門にひびきわたった。] 誰かが耳門を、ちょうど樽でも叩くように、ブン！ブン！ブン！と (a) 叩いているのだ<sup>9</sup>。

P <sub>NPST</sub> + ノダ <sub>NPST</sub>	P <sub>NPST</sub> + ノダ + タ <sub>PST</sub>	P <sub>PST</sub> + ノダ <sub>NPST</sub>	P <sub>PST</sub> + ノダ + タ <sub>PST</sub>
叩いているのだ (a)	ぼん！ぼん！ぼん！ と響くのだった (d)	木戸にうつろな音を させたのである (e) 叩いていたのだ (j)	叩いたのだった (b)

対応する原文のロシア語は不完了体動詞過去形 *бил* (叩いていた) であるが、この部分は 10 点の翻訳のうち、半分の 5 点でノダ文が登場する<sup>10</sup>。原文の同一箇所和訳にこのようにノダ文のテンスの組み合わせ 4 種類の全てが用いられるのはこの一例しかなく、多くの場合、1～2 種類に集中する傾向が見られる。

ノダ文の複合テンスの組み合わせ 4 種類はその性格の違いから二つの視点で論じることができる。ひとつは、ノダのテンスを共通として命題部分が異なるテンスを有する場合の差異についての検討——例：する (ノダ/ノダッタ) VS した (ノダ/ノダッタ) ——であり、もうひとつは命題部分のテンスを共通として、ノダのテンスの差異を論じる見方——例：(する/した) ノダ VS (する/した) ノダッタ、である。ノダ文研究では後者の視点にたつものが多く、その場合は命題中の述語テンスの差は命題が述べる事態の時間的特徴づけに留まる。実際にはこの二つの分類はクロスすることが多く、4 種類の中の言換えは、(2) のように、比較的柔軟な場合もあれば、逆に言換えを許さない場合もあり、その条件や環境は命題部分に使用される動詞語彙意味、動詞のテンス・アスペクト形態の特性、それが現れる位置 (命題部分かノダ部分か)、ノダ文に本質的なモダリティ要素が顕在化する程度などが複雑に絡み合い一筋縄ではいかない。

4 種類の組み合わせの中でも「ノダッタ」に関しては、書き言葉、物語りや小説などの地の文に特徴的な表現として特別に言及されることが多い (三上 1953/1972:240、丹羽 1992、野田 1997:102、田野村 2002:117)。「ノダ」の場合は、話者が発話時現在 (あるいは語る現在) から話題となっている出来事に視

<sup>9</sup> 以下、訳文中の旧仮名遣いは読みやすさの便宜を考え現代仮名遣いに改めている。

<sup>10</sup> ノダ文を使っていない翻訳は以下の通り。テイル形を使った「叩いていた (f)」と「叩いている (g, h)」が 3 点、単純テンスで済ます「木戸をノックした (c)」と「(ポーン！ポーン！ポーン！と) 聞こえる (j)」の 2 点である。

点を向けているのに対して、「ノダッタ」の場合は話者の立ち位置が現在にはなく、過去の出来事の生起時に移動する（丹羽 1992:17-18、野田 1997:102、田野村 2002:117）。本来、語り手となる人物は語りの現在時からしかその行為を行うことはできず、過去の時点に視点を、つまり自分自身を、移すという操作は語りの中でのみなせる業である。したがって、「ノダ」の場合は命題部分で表される出来事（過去であっても非過去であっても）に対する話者の現時の心的態度が直接的に前面に出るが、「ノダッタ」の場合は、「過去の事態の展開をその場面にいた全知の傍観者の立場から描写しているかのような表現効果が生じる」（田野村 2002:118-119）<sup>11</sup>。三上（1972:240、247）は「ノダ」が主観的、解説的であるのに対し、「ノダッタ」は「過去における現在または過去（大過去）」を表わし、客観的、叙述的になると指摘する。

また、「ノダッタ」に関しては、反復や習慣を表すときに使われることが多いと言われているが、田野村は命題を既成事実として提示するノダ文の性質を背景に、「ある動作が既成事実としてあった」という提示の仕方が反復・習慣の意味と結びつきやすく、また、それは命題部分の述語が非過去形である場合に、そのような含みを持たせる可能性を認めながらも、そのような解釈を積極的に促すのは第一に文脈であること、さらに反復の含みは「ノダッタ」に限らず、「ノダ」でも現れると主張する（田野村 2002:120-122）。

ノダ文についてはロシアの日本語研究者による以下の指摘がある。ノダ文のロシア語翻訳について、ゴロヴニン（Головнин 1973:75）は「するのだ」型（ $P_{NPST} + \text{ノダ}_{NPST}$ ）は現在・未来形で訳し、他の3種類は過去形で訳すべきだと述べる。さらにこの3種類のそれぞれについて、ノダ文の共通意味（真実性の強調 *подчеркнутая достоверность*・説明的ニュアンス）を保持しつつ、「したのだ」型（ $P_{PST} + \text{ノダ}_{NPST}$ ）は過去の動作の結果と現在との結びつきを、「するのだった」型（ $P_{NPST} + \text{ノダ} + \text{タ}_{PST}$ ）は過去の反復する（非瞬間的、持続的）動作や恒常的特徴の意味を、「したのだった」型（ $P_{PST} + \text{ノダ} + \text{タ}_{PST}$ ）は一回の（瞬間的な）動作の意味、を特徴的に表すと主張した。バス（Басс 273-278, 283-284）はさらに踏み込んで、「するのだった」型（ $P_{NPST} + \text{ノダ} + \text{タ}_{PST}$ ）で表わされる状況は過去における持続的過程、反復状況、一般的事実を含み、したがって、ロシア語の不完了体動詞の意味範囲に相当すると主張する。この指摘が正しいか否かは具体例を見てから検討することにする。改めてさきほどの文例に戻ってみる。

<sup>11</sup> ノダにおいても「全知の傍観者」のような「特殊視点」は可能であるが、ノダは通常の視点も有することから、ノダッタほどにはその「特殊視点」が目立たない（田野村 2002:119）。

(3) (=2)) [*Но под страстной понедельник, поздно вечером, вдруг раздался зловецкий стук в ворота;*] *кто-то был в калитку, как в бочку: бум! бум! бум!*

〔ところが、復活祭すぐ前の月曜日に、夜おそくなってから、だしぬけに不吉な物音が門にひびきわたった。〕誰かが耳門を、ちょうど樽でも叩くように、ブン！ブン！ブン！と (a) 叩いているのだ。

下線部「(a) 叩いているのだ」を他の複合テンスの形——「叩いていたのだ (j)」「叩いていたのだ (cf. (d) 響くのだ)」、「叩いていたのだ (cf. (b) 叩いたのだ)」——と交換しても、この文例の場合はいずれを使っても違和感がない。だが、やはり、指摘されている通り、「ノダッタ」ではなくまさに「ノダ」の時に、出現した場面を語り手が何らかの意味のある場面（見せ場・やま場）としてことさら強調する感じを受ける。一方、原文で使用されている不完了体動詞過去形からは状況描写（この場合はセミコロンの使用により、前文との論理的関係が背景描写であることも明確になる）が強められていることはない。もっとも、ロシア語の原文で場面の緊張感をもたらすのはその前文にある「不吉な物音が門にひびきわたった」という部分で、「ひびきわたった」が完了体動詞過去形 *раздался* で登場する。この部分は全和訳の 10 点でシタ形が用いられており、これは物語を展開する新しい出来事の生起にノダ文が現れないという先述の指摘に叶う。だが、日本語とロシア語のテンス・アスペクト形態の意味づけの差異から、安定的な状況も述べることのできるシタ形では十分に出来事生起のインパクトが伝わらない点も述べた通りである。

#### 4. チェーホフ「可愛い女」の和訳に出現するノダ文

##### 4.1 『可愛い女』の和訳に見られるノダ文

では、『可愛い女』の和訳に見られるノダ文の量的分析に入ろう。検討した和訳 10 点のそれぞれにおいて、会話部分と時制をもたない「ダロウ」のような推量表現や疑問文を除き、地の文で使用されている言い切り文の総数に占めるノダ文の割合は表 1（次頁）の通りである。

表 1 に見られるように、翻訳の地の文に占めるノダ文の使用は、訳によって 6.72%～23.29%までの幅があり、平均 14.33%となる。ノダ文が反映していると想定される言語表現が原文にほぼ（後述 5 節）無いところでそれが登場することを考えると、この数字はかなり高いのではないだろうか。このように訳者にとってノダ文の使用率に幅があるとすると、どのような箇所にノダ文が使われているのか、そしてなぜ訳者によって使ったり使わなかったりということが起こるのか気になる。

表 1

翻訳記号	言い切り文の数	言い切り文に占めるノダ文の数 (%)
a	301	21 (6.98%)
b	198	40 (20.20%)
c	249	58 (23.29%)
d	196	36 (18.37%)
e	279	45 (16.13%)
f	199	18 (9.05%)
g	238	16 (6.72%)
h	199	22 (11.06%)
i	245	49 (20.00%)
j	235	27(11.49%)
平均		14.33%

次に、ロシア語原文における言い切り文の総数 194 文のそれぞれに対して、和訳でノダ文を使用しているのは 10 点のうち何点あるのか、つまりノダ文の登場が複数の和訳においてどれだけ一致するのかを調べた結果が次頁の表 2 である。

表 2 は以下のことを示す。ロシア語原文で対象とする 194 文のうち、全体のおよそ 46%にあたる 89 文にはいずれの和訳においてもノダ文が登場しない。だが、残りの、約 54%を占める 105 文には、いずれかの和訳においてノダ文が使われているということになる。だが、そのうちの 55%近くは和訳 10 点のうち、1～2 点でしかノダ文が登場せず、対象とした和訳の半分にあたる 5 点で登場するものまでをあわせると、全体の 8 割 (83.81%) を超える。逆に、全和訳 10 点とそこにほぼ全てと言ってもよい 8～9 点でノダ文が使用される割合を合算しても、全体の 6%にも届かない。したがって、ノダ文の使用は、かなりの程度、翻訳者の裁量に任されていることがわかる。

同様の結果は『アンナ・カレーニナ』の抜粋を二人の訳者で比較したバスの分析にも見られる。バス (Бас 2004:269-270) は、訳者によって和訳テキスト中のノダ文の使用回数や使用箇所が異なる理由として、記述されている事態の重要さの程度について訳者のイメージが異なる可能性を示唆する。

以下では、このように比較的自由に用いられるノダ文が、訳者に (ほぼ) 一様に用いられる文について、述語部分に用いられるテンス形態とアスペクトの関係に注目しながら考察する。

表 2

ロシア語の同一箇所 ノダ文が登場する翻訳の数	言い切り文の数 (%)		ノダ文を使用する全翻訳箇所に 占める割合
0	89 (45.88%)		
1	105 (54.12%)	34	32.38%
2		24	22.86%
3		13	12.38%
4		8	7.62%
5		9	8.57%
6		7	6.67%
7		4	3.81%
8		2	1.90%
9		2	1.90%
10		2	1.90%
計	194		105

#### 4.2. 多くの翻訳に登場するノダ文

ここでは、ロシア語原文の同一箇所を多くの訳者（9～10人）がノダ文を用いて翻訳しているケースを検討する。まず、検討対象とした全ての10訳でノダ文が使われているのは以下の二例である。

(4) *Он был мал ростом, тощ, с желтым лицом, с зачесанными височками, говорил жидким тенорком, и когда говорил, то кривил рот; и на лице у него всегда было написано отчаяние, но всё же он возбудил в ней настоящее, глубокое чувство.*

彼は背の低い、痩せぎすな男でいつも黄ろい顔をして巻毛の髪をうしろへ撫でつけていて、淡いテノールで話をした。そして口をきくときには、口を歪めるくせがあった。彼の顔には、常に絶望的な表情が浮かんでいた。それにもかかわらず、やっぱり彼は彼女の胸に真実の、深い感情を(a)よび起したのである。

P <sub>PST</sub> + ノダ <sub>NPST</sub>	P <sub>PST</sub> + ノダ + タ <sub>PST</sub>	P <sub>NPST</sub> + ノダ + タ <sub>PST</sub>
呼び起こしたのである (a, c) <sup>12</sup>	かきたてたのだった (f)	呼び起こすのだった (j)
呼び醒ましたのである (b, d, e, i)	呼び起こしたのだった (h)	
呼び起こしたのだ (g)		

ノダ文で訳出されているのはロシア語の完了体動詞過去形 *возбудил* (呼び起こした) である。ノダ文を使った述部を見てみると (a) 「呼び起こしたのである」の構造をとるものが7点あり、(f) 「かきたてたのだった」の形をとるものが2件ある。なお、(j) 「いつも<略>呼び起こすのだった」は、「いつも」という副詞が使われており、ロシア語の完了体が示す一回の結果的出来事を示す訳にはなっていない。上述した3種類のテンスの組み合わせ以外に、第4の組み合わせである、(a) を書き換えれば「深い感情を (a') 呼び起こすのである」になるであろう型があるが、当該箇所の翻訳では登場しない。(a') は反復の意味で解釈されるのが恐らく最も自然であるので、当該の文脈では、(j) と同じ理由でロシア語の完了体動詞による一回の出来事性を表現できない。別の見方をすれば次のように言えるだろう。当該箇所に先行する部分では、属性を表す形容詞文や不完了体動詞が動作や状態の反復を表わしており、それによって男のいつもの冴えない様子が記述されている。それにも関わらず「オーレンカが恋に落ちた」という出来事は、物語を進行させるメルクマールの一つとなり、完了体動詞の使用によって単一出来事性がことさら強調される。また、このように継起的な場面展開の場合、さきほどの(3)と異なり、意味を変えずに命題部分のテンスを入れ替えることは困難である。物語が確実に<静>から<動>に動いた瞬間の時間的定位性は、命題部分に過去形(タ)が用いられることで保証されると考えられる。

また、ロシア語の原文には語り手(話者)の記述された事態に対する判断、態度を表す *все же...* (やっぱり) というモーダルな表現が使われている点もノダ文を使いやすい環境を整えている可能性がある。

(5) *Но проходит еще минута, слышатся голоса: это ветеринар вернулся домой из клуба.*

ところが、また一分間ほどすると、人声が聞えてくる。(a) それは獣医がクラブから帰って来たのだった。

<sup>12</sup> 漢字使用の有無など表記のし方は各訳で異なる可能性があるが、本稿では各訳を対照させやすくするため、読みの共通点のみを考慮し、表記はひとつに統一させている。

$P_{PST} + \text{ノダ}_{NPST}$	$P_{PST} + \text{ノダ} + \text{タ}_{PST}$
帰って来たのだ (d, e, f, g, i, j)	帰って来たのだった (a, b)
	戻ったのだった (c)
	戻って来たのだった (h)

ノダ文が相当するのはロシア語の完了体動詞過去形 *вернулся* (帰って来た) である。ノダ文を使った述部を見てみると、(d)「帰って来たのだ」の形をとるものが6件あり、(a)「帰って来たのだった」の形をとるものが4件ある。翻訳がこの二つの複合テンスのタイプに限定されるところは(4)の例と同様である。また、これも(4)と同じように命題部分を非過去形(帰って来るのだ/来るのだった)にすると獣医の帰宅が(出来事発生時からみた)未来のことになり、意味が変わってしまうので交換できない。この(5)とさきほどの(3)はある出来事(音や声が聞こえた)の背景を説明する文脈という点で共通するが、(3)の場合は命題部分のテンスの入れ替えが可能であり、(5)の場合は不自然である。これには命題の述語部分に使われる動詞のアスペクチュアルな語彙意味とそれに関連した語形態(スル/シタ形やテイル/テイタ形)の文法意味の差が影響を与えている。

このロシア語原文にも、ノダ文を引き寄せやすい表現が使われている。先行事態と後続事態との関連性を示す助詞 *это* を使う「(P) *это* Q」の構文である。これについては5節で別途触れる。

次は10訳中、9訳でノダ文が使われた箇所である。これも二例しかない。

(6) [*с*] *сердце у нее сладко замирало, спать совсем не хотелось, и, когда под утро он возвращался домой, она тихо стучала в окошко из своей спальни и, показывая ему сквозь занавески только лицо и одно плечо, ласково улыбалась...*

彼女の心はほろ甘く沈んだ。眠いとは全然おもはなかった。朝方に、クーキンが家へ帰って来ると、彼女はしづかに自分の寝室から小窓のところへ行って、彼にただ顔と一方の肩とだけを見せながら、(a) ねんごろに頬笑んだ...

$P_{PST}$	$P_{NPST} + \text{ノダ} + \text{タ}_{PST}$
微笑んだ (a)	微笑むのだった (b-h, j)
	微笑みかけるのだった (i)

ノダ文はロシア語の不完了体動詞過去形 *улыбалась* (微笑んだ) を訳出する

ものである。この箇所は (a) を除く 9 訳でノダ文が使用されており、またそのすべてが「(b) 微笑むのだった」の構造を持つ。不完了体動詞による動作の反復の意味には、完了体動詞が表す単一出来事とは異なり、時間的定位性がない。このことが命題部分における非過去形 (ル) の選択を積極的に促すものと考えられる。

(7) *И она уже имела свои мнения и за ужином говорила с родителями Саши о том, как теперь детям трудно учиться в гимназиях, но что все-таки классическое образование лучше реального, так как из гимназии всюду открыта дорога: хочешь — иди в доктора, хочешь — в инженеры.*

こうして、彼女はすでに自分の意見をもつことになった。そして夜食のあとではサーシャの両親と、今では中等学校 [ギムナー ज्या] の学科は大へんむずかしくなっているということや、しかし、やっぱり実業学校よりすぐれた点もっている、なぜかなれば、中等学校からなら至るところに道がひらけている、医者になりたければ医者に、機械技師になりたければ機械技師になることができるからだということなどを (a) 話しあった。

P <sub>PST</sub>	P <sub>PST</sub> + ノダ <sub>.NPST</sub>	P <sub>PST</sub> + ノダ + タ <sub>.PST</sub>	P <sub>.NPST</sub> + ノダ + タ <sub>.PST</sub>
話しあった (a)	述べ立てたのである (e)	語ったのだった (j)	述べ立てるのだった (b, h) 語るのであった (c, g) 言うのだった (d) 話すのだった (f) 口を叩くのだった (i)

この箇所も (a) 以外の 9 訳でノダ文が登場する。ロシア語の原文では不完了体動詞過去形 *говорила* (話した) に相当する。ノダ文を使った述部を見てみると、「(b) 述べ立てるのだった」の形をとるものが 7 件、他に「(e) 述べ立てたのである」の形をとるもの、「(j) 語ったのだった」の形をとるものが 1 件ずつある。

10 点の翻訳全てにノダ文が登場する例 (4) と (5) は、ロシア語原文では完了体動詞過去形を用いていたが、9 点の翻訳に使用されたノダ文に対応していた例 (6) と (7) には不完了体動詞過去形が使われていた。したがってノダ文そのものの登場とロシア語動詞のアスペクトの差異は無関係である。だが、使用されるノダ文の内部構造別にみると、ロシア語の完了体動詞過去形に対応する訳

では「したのだ」の形をとるものが多く ((4) と (5) を合わせて 13 件)、ついで「したのだった」の形が続く (6 件)。両者は命題部分に過去形を取る点で共通する。一方、不完了体動詞過去形に対応するものでは、「するのだった」((6) と (7) を合わせて 16 件) の構造をとるものが最も多く、他に「したのだ」と「したのだった」の形が 1 件ずつある。

ロシア語原文の同一箇所訳出に際して和訳 10 点におけるノダ文使用の一致率に関係なく、和訳にノダ文が登場するロシア語の言い切り文の対象 105 文 (参照: 表 2) に対して、使われている PF と IPF と訳出されるノダ文の複合テンスのタイプに相関性があるかを検討したのが次の表 3 である。同様に、ロシア語の動詞の過去形と現在形の区別とノダ文の複合テンスの相関性を表したのが表 4 である。

表 3

	P <sub>.NPST</sub> + ノダ <sub>.NPST</sub>	P <sub>.NPST</sub> + ノダ+タ <sub>.PST</sub>	P <sub>.PST</sub> + ノダ <sub>.NPST</sub>	P <sub>.PST</sub> + ノダ+タ <sub>.PST</sub>	計
PF (14 箇所)	7 (12.5%)	9 (16.07%)	33 (58.93%)	7 (12.5%)	56
IMPF (91 箇所)	43 (16.17%)	198 (74.44%)	22 (8.27%)	3 (1.13%)	266
105 箇所					

表 4

	P <sub>.NPST</sub> + ノダ <sub>.NPST</sub>	P <sub>.NPST</sub> + ノダ+タ <sub>.PST</sub>	P <sub>.PST</sub> + ノダ <sub>.NPST</sub>	P <sub>.PST</sub> + ノダ+タ <sub>.PST</sub>	計
PST (81 箇所)	20 (7.35%)	187 (68.75%)	55 (20.22%)	10 (3.68%)	272
PRS (22 箇所)	23 (53.49%)	20 (46.51%)	0 (0%)	0 (0%)	43
103 箇所 (※)	※ 仮定法が使われている 2 箇所を除く				

表 3 から明らかなように、ロシア語原文で用いられる完了体動詞に、和訳でノダ文が対応する場合、「したのだ」型が登場することが多く、一方、不完了体動詞にノダ文が対応する場合は、「するのだった」型が現れることが多い傾向がある。ゴロヴニン (Головнин 1973:75) は「したのだ」型にパーフェクト

の意味を認めたが、その意味はロシア語の完了体動詞の反映として表されていると言えそうである。また、「するのだった」型がロシア語の不完了体動詞の意味範囲に相当すると述べたバスの指摘 (Басс273-278, 283-284) にも一致する結果になっている。

表4を補足すると、ロシア語原文で現在形が用いられている場合、それは例示的用法で用いられる完了体動詞の1例を除き、全て不完了体動詞である。歴史的現在とも名付けられるこの用法は、不完了体動詞に特有なもので、これは和訳の中で命題内部の述語が非過去形になっている点にすっかり反映されている。だが、それに続くノダの形式そのものには現在形(ノダ)も過去形(ノダッタ)も同程度に見られる点が興味深い。ロシア語原文で過去形が使用されている箇所に日本語訳の「するのだった」型の複合テンスが多く使用されているのは、表3で不完了体動詞に対応する複合テンスにこのタイプが使用されていることと呼応しており、不完了体動詞過去形による動作の反復の意味、すなわち過去における時間的定位性の欠如が命題部分の非過去形の選択に影響を与えていると考えられる。

## 5. (P) *это* Q の構文

さきほど保留にしておいたノダ文と部分的に機能が一致するロシア語の構文について述べる。該当する文は以下のものであった。

(8)(=5) *Но проходит еще минута, слышатся голоса: это ветеринар вернулся домой из клуба.*

ところが、また一分間ほどすると、人声が聞えてくる。(a)それは獣医がクラブから帰って来たのだった。

本稿で検討した多くの事例では、対応するロシア語原文において、その和訳にノダ文の使用を促すような、明示的な構文的特徴は見出せないのであるが、当該の文にだけはロシア語の構文と日本語の構文が機能的に重なる。それは先行する状況(P)と後続する状況(Q)を助詞*это*でつなぐ「(P) *это* Q」構文である。例えば『研究社露和辞典』(1988:2693)の*это*の項目では以下のような説明と例文が載っている。

1 A) 記述の状況・考えを暗に指し示しながら、直後の名詞・代名詞を強調する

*Это Ольга играла на пианино.*

あれはオリガがピアノをひいていたのよ。

*Это ты виноват, что мы опоздали на поезд.*

私たちが列車に遅れたのは君のせいだ。

B) 後続文の文頭において先行文の説明を行う

*Послышались шаги и тяжелое дыхание: это вверх по лестнице поднимался доктор.*

足音と苦しそうな息づかいが聞こえた。あれはドクターが階段をのぼってきたのだった。

本稿の(8)に登場する *это* は、上の辞書的説明のB)の用法である。もっとも、A)の例においても、訳文にノダ文が使われていたり、使われていなくても、「君のせいで列車に遅れたのだ」と言い換えられる。このような文脈で用いられる *это* は *Это потому, что*~ (それはなぜなら~) という意味で出来事の説明に用いられること (ТСРЯ 1940:1440)、前方照応的、ダイクティックな機能を持つこと (Падучева: 1982:82-83) が指摘されてきた。部分的にはノダ文と「(P) *это* Q」構文は機能的な意味で重なる部分があると思われるが、この構文はロシアの日本語研究者 (Головнин 1973, Басс 2004) が挙げているノダ文のロシア語訳には一度も登場しない。ゴロヴニンはノダ文の真実性の強調や説明のニュアンスを類推させるものとして、ロシア語の *видите ли, ведь, сказать правду, вот в чем дело* 等を挙げているくらいである (Головнин 1973: 75)。「(P) *это* Q」構文とノダ文の相似点や相違点については、他の言語においてノダ文と比較対象となっている *it is (...) that* ~、*es que* ~、*c'est (...) que* ~ 構文等の議論を参考にしながら今後の検討課題としたいが、両者間には、何よりも、使用頻度と、個別の言語内に占める意味役割において、大きな違いが認められることは確かである。

## 6. まとめ

『可愛い女』の日本語訳 10 点を通して、ノダ文が相対的に高い使用頻度で登場することと同時にノダ文使用における話者 (本稿の場合は翻訳者) の極めて高い自由度も確認された。具体的に言えば、『可愛い女』のロシア語原文における、およそ半分の言い切り文はいずれかの翻訳でノダ文の形をとって訳出されていた。その一方でノダ文が使用される箇所が 10 人の翻訳者で一致することはかなり少ない。また、ロシア語原文で完了体と不完了体で表されるアスペクトのコントラストとノダ文の登場とは無関係であることもわかった。だが、同時に、ノダ文の 4 種類の複合テンスの形式にロシア語動詞のアスペクト的特徴が反映されていることが確認できた。すなわち、ロシア語の不完了体動詞が

表す動作の反復の意味には時間的的定位性が欠如しており、それはノダ文の命題部分に非過去形が用いられることに反映されている。そして完了体動詞が表す単一出来事の生起とその時間的的定位性は、ノダ文で命題部分のテンスに過去形を採用することと関係する。残された課題としては、命題部分に用いられる動詞のアスペクチュアルな語彙意味やテイル形の有無と、ノダ文の複合テンスとの相関性の考察、名詞文に変換されない文の特徴の検討、ロシア語における「(P) *это* Q」構文とノダ文の比較、などである。

本稿では、ロシア語と日本語の対照言語学的考察を行うにあたり、個別言語の統一体を特徴づける「言語的世界像」やそれを象徴的に表す「意味的優要素」といった理念的枠組みを背景に、ロシア語と日本語の語りのテキストにおける動的事象の表現の仕方を検討した。語られる対象は時間の流れに沿った筋道を持つという意味でアスペクトやタクシスと密接に関係する。同時に、語りは語り手がいるという意味でモダリティとも切り離せない。本研究はそれぞれのカテゴリー内に収まって検討していたらわからないであろう、言語全体を左右する優勢的視座というものの在り処を探る試みであった。

プルンギャンは動詞の意味に二つの意味領域を区別する。一つはアスペクト・タクシスの意味領域であり、もう一つはモダリティの意味領域である。両者の意味領域に属する意味は、物理的な時間に主として結びつく、状況の現実的パラメーターを記述する《客観的》意味と、話者による現実の状況への評価を記述する《主観的》意味としても対立する (Плунгян 2000: 290)。ロシア語の場合、アスペクト形態を使い分けることで事態の展開の緩急をあらわし、日本語の場合、主観的フィルターを通して事態を構成する場面に濃淡をつける。日本語の動詞のアスペクト形態は、ロシア語のそれが与えるほどに表現力のインパクトは持たないが、それに代わって日本語の場合は、*оценочная модальность* の要素がロシア語以上に活発に力を発揮する。それは、ロシア語の原文における動詞文が日本語に翻訳される際に名詞文へと構造変換することによって、語られる事態は「動き」をとめ、評価の対象として「品さだめ [文]」(佐久間) を受ける安定した存在様式を獲得することによって可能になる。今回は翻訳文に現れるノダ文に限定したが、ノダ文以外の名詞文も加えるとさらにその量はさらに増える。ゾロトヴァは、言語外現実中存在する動作が動詞で、事物が名詞で表される文モデルは「最も経済的で簡潔」(Золотова 1998b:110) と述べたが、それによればロシア語の動詞文から日本語の名詞文への変換操作は“非経済的”ということになりそうである。このことは日本語において必要な情報伝達だけを考えると非経済的である複雑な敬語体系が発達していることとも繋がるであろう。アスペクトの緩急とモダリティの

濃淡は、手段は異なれど、当該言語の話者にとっては、それぞれに魅力的な起伏に富むコントラストを生み出すという意味において共通し、語られる作品の魅力を増やうものにはならない。それ以上に、目標言語において自然なものに変換されるからこそ、文学作品の内容的価値がより効果的に伝わるとも考えられる。

### 参考文献

- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』 講談社.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店.
- 井島正博 (2010) 「ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』 6, 75-117.
- 奥田靖雄 (1990) 「説明(その1) ——のだ、のである、のです——」『ことばの科学4』 むぎ書房, 173-216.
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』 くろしお出版.
- 大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究: 主観性をめぐって』 南雲堂.
- 影山太郎 (1990) 「日本語と英語の語彙の対照」『日本語の語彙・意味』 明治書院, 1-26.
- 影山太郎 (2002) 『ケジメのない日本語』 岩波書店.
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」『日本語文法の諸問題』 ひつじ書房, 139-161.
- 金子百合子 (2005) 「ロシア語アスペクト体系における意味的優勢素と開始表現——日本語に映し出される姿——」『ロシア語ロシア文学研究』 37, 25-33.
- 川戸道昭, 榊原貴教編著 (2012) 『世界文学総合目録 第8巻ロシア編』 ナダ出版センター.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店.
- 久野暉 (1983) 『新日本文法研究』 大修館書店.
- 崔 眞姫 (2003) 「日本語の「のだ」と朝鮮語の「것이다 gosida」の対照研究」『Clavel』(神戸市外国語大学対照研究セミナー) 1, 12-23.
- 佐久間鼎 (1995) 『日本語の特質』 くろしお出版.
- 佐治圭三 (1991) 『日本語文法の研究』 ひつじ書房.
- 清水佳子 (1997) 「主題連鎖と「のだ」との関連」『現代日本語研究』 4, 大阪大学現代日本語学講座, 47-61.
- 霜崎實 (1981) 「「ノダル考」——テキストにおける結束性の考察——」『Sophia Linguistica』 7, 116-124.
- 下地早智子 (2003) 「小説などの日中翻訳における「のだ」と“(是) …的”の

- 対応形式」『Clavel』(神戸市外国語大学対照研究セミナー) 1, 24-34.
- 新屋映子 (2014) 『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房.
- 杉村博文 (1980) 「の」「のだ」と「的」「是……的」『大阪外国語大学学報』49, 75-89.
- 田野村忠温 (2002) 『現代日本語の文法1——「のだ」の意味と用法』和泉書院.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版.
- 名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能』くろしお出版.
- 仁田義雄 (2000) 「2 認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法第3巻モダリティ』岩波書店, 79-159..
- 丹羽哲也 (1992) 「過去形と叙述の視点」『国語国文』61:9, 16-34.
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版.
- 林大 (1964) 「ダとナノダ」『講座現代語6 口語文法の問題点』明治書院, 282-289.
- 林八龍 (1995) 「日本語と韓国語における表現構造の対照考察」『——日本語の名詞表現と韓国語の動詞表現を中心として——』明治書院, 265-281.
- 福嶋教隆 (1994) 「「のだ」と es que」『国立国語研究所報告108 日本語とスペイン語(1)』, 57-81
- マクグローイン・H・直美 (1984) 「談話・文章における「のです」の機能」『言語』13:1, 254-260.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』くろしお出版.
- 益岡隆志 (2013) 『日本語構文意味論』くろしお出版.
- 三上章 (1972) 『現代語法序説』くろしお出版.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
- 森田良行 (1995) 『日本語の視点』創拓社.
- 森田良行 (1998) 『日本人の発想、日本語の表現』中央公論社.
- 吉田茂晃 (2000) 「ノダの表現内容と語性について——〈ノダ〉は『説明の助動詞』か——」『山邊道』44. 天理大学国語国文学会, 17-31.
- 和佐敦子 (2003) 「スペイン語の ¿Es que…? とノ(ダ) 疑問文」『Clavel』(神戸市外国語大学対照研究セミナー) 1, 35-47.
- Апресян, Ю.Д. (ред.). (2006). *Языковая картина мира и системная лексикография*. М.: Языки славянских культур.
- Басс, И.И. (2004) *Проблемы современного японского языкознания: Лингвистика*

*текста*. СПб.: СПбГУКИ.

- Головнин, И.В. (1973) *Учебник японского языка*. Ч.II М.: Высшая школа.
- Золотова, Г.А. (1998a) «Глава I. Введение в коммуникативную грамматику», Золотова, Г.А. Онипенко, Н.К., Сидорова, М.Ю. *Коммуникативная грамматика русского языка*. М.: Филологический факультет МГУ, 6-35.
- Золотова, Г.А. (1998b) «Глава III. Модели предложений в системно-коммуникативном аспекте», Золотова, Г.А. Онипенко, Н.К., Сидорова, М.Ю. *Коммуникативная грамматика русского языка*. М.: Филологический факультет МГУ, 102-206.
- Зализняк А.А., Левонтина И.Б., Шмелев, А.Д. (2012) *Константы и переменные русской языковой картины мира*. М.: Языки славянской культуры.
- Канэко, Юрико & Петрухина Е.В. (2004) «Аспектуальная семантика в глагольных системах русского и японского языков (сопоставительный анализ фрагментов языковой картины мира)», *Вопросы языкознания*, 4, 19-33.
- Канэко, Юрико (2005) *Начинательность в системе аспектуальных значений в русском языке в сравнении с японским языком. Опыт сопоставительного анализа языковых картин мира*, КД, Токио.
- Князев, Ю.П. (2007) *Грамматическая семантика: Русский язык в типологической перспективе*. М.: Языки славянских культур.
- Падучева, Е.В. (1982) «Значение и синтаксические функции слова это», *Проблемы структурной лингвистики*, Москва: Наука, 76-91.
- Падучева, Е.В. (1996) Неопределенность как семантическая доминанта русской языковой картины мира, *Determinatezza e indeterminatezza nelle lingue slave. Problemi di morfosintassi delle lingue slave*. 5. Padova, 163-185.
- Петрухина, Е.В. (2003) «Доминантные черты русской языковой картины мира (в сравнении с чешской)», *Русское слово в мировой культуре. Пленарные заседания: сборник докладов*, Т.1, Санкт-Петербург: X Конгресс МАПРЯЛ, 426-433.
- Плунгян, В.А. (2000) *Общая морфология: Введение в проблематику*, Москва: УРСС.
- Ушаков, Д.Н. (ред.) (1940) *Толковый словарь русского языка*. М.: Государственное издательство иностранных и национальных словарей. (ТСРЯ)
- Alfonso, A. (1966) *Japanese language patterns*. Vol.1. Tokyo: Sophia University, 404-429.

- Ikegami, Yoshihiko (1993) «What does it mean for a language to have no singular-plural distinction? Noun-Verb homology and its typological implication», Richard A. Geiger, Brygida Rudzka-Ostyn (eds.) *Conceptualizations and mental processing in language*, Berlin-NY: Mouton de Gruyter, 801-814.
- Wierzbicka, A. (1992) *Semantics, Culture, and Cognition*. NY-Oxford: Oxford University Press.

## 出典

- Чехов А.П., «Душечка», А.П. Чехов, *Полное собрание сочинений и писем в 30 т.*, Т.10, Москва: Наука, 1977, 102-113.
- a. 梅田寛訳 (1934) 「可愛い人」三笠書房
  - b. 神西清訳 (1940 / 2004) 「可愛い女」岩波文庫 改版 岩波書店
  - c. 佐藤清郎訳 (1969) 「かわいい女」『三人姉妹／桜の園他』集英社
  - d. 小笠原豊樹訳 (1970) 「かわいい女」『かわいい女・犬を連れた奥さん』新潮文庫 新潮社
  - e. 原久一郎訳 (1970 / 1972) 「可愛い女」『可愛い女、ヴァーニャ伯父さん、三人姉妹ほか』日本ブッククラブ
  - f. 原卓也訳 (1978) 「可愛い女」『三人姉妹／桜の園他』集英社
  - g. 児島宏子訳 (2006) 『可愛い女』未知谷
  - h. 松下裕訳 (2009) 「かわいいひと」『チェーホフ短編集』筑摩書房
  - i. 浦雅春訳 (2010) 「かわいいひと」『馬のような名字』河出書房新社
  - j. 沼野充義訳 (2010) 「かわいい」『新訳チェーホフ短編集』集英社

謝辞：本研究は JSPS 科研費15K02523の助成を受けたものです。

Keywords: ロシア語 日本語 アスペクト モダリティ ノダ文